

織田作生誕 100 年 — 織田作之助とプラネタリウム

加藤 賢一

1. 夫婦善哉の織田作之助

2013 年は大阪物を良くした作家織田作之助 (1913-1947) の生誕 100 年にあたっていた。新聞でも結構とり上げられて、ちょっとした話題となったが、残念ながら、実のところ織田作を知る人は少ない。太宰治や坂口安吾などと共に無頼派と言うか、破滅派と言うか、ともかく世間的にはハチャメチャな、ひどく他人迷惑な生活を送った人だったが、旺盛な執筆活動を行った大流行作家でもあった。そんな流行作家が電気科学館のプラネタリウムに少しく関心を持っていたというのは面白いし、職員にとっては実にありがたいことだった。世間の汚辱にまみれることを看板にしているような作家が、モダンの象徴のようなプラネタリウムに目が向いていた、というのは織田作を理解する上でも興味深い。

ところで、彼の代表作は言わずと知れた (最近はそうでもないか) 「夫婦善哉」である。ダメ男に尽くす浪花女蝶子の物語だが、蝶子のモデルは織田作の姉で、ほとんど実話ということである。かくの如く、モデルが無いと書けない作家だったから、彼の作品には昭和 10 年代の大阪の風景がきちんと織り込まれている。作家活動を始めたのは昭和 10 年頃で、それから 10 余年で逝ってしまったので、彼の描くのは戦後数年迄の短い期間である。

現在の生魂小学校正門付近の貧乏長屋に生まれ育った。生来の秀才だったから、府立高津中学を経て京都の三高文科へと進むことができた。それから立身出世の道を歩むかと思いきや、病弱だったことも手伝い、ここで挫折し、金も無いのに放蕩を尽くし、とうとう放校となってしまう。演劇に興味を持っていたことから、作家の途を歩むことになり、そこで描いたのは自分の生まれ育った貧乏長屋であり、姉たちであり、大阪の町だった。戦中はしばらく不自由なこともあったが、戦後は活字に飢えていた世間が織田作を求めた。そこで、結核に侵された体を治療することもなく覚醒剤を打ってペンを握り続け、33 歳で散ってしまった。その間、肉親や女性には迷惑のかけっぱなしで、日本軽佻派と自称していたそれを地で行くような暮らしぶりだった。

2. 「わが町」とプラネタリウム

織田作は相当ひねくれ者だったようだが、大阪やその人たちにはとても優しい。プラネタリウムが描かれたのは「わが町」という作品である。

主人公佐渡島他吉 (タあやん) はフィリピンのベンゲット道路工事に行き、過酷な労働に耐えながらも、帰国してみれば無一文だった。女房お鶴との間に生まれた娘お初が幼少の頃に渡って 6 年、すでに 11 歳になっていた。この間、仕送りが途絶え、お鶴は必死の思いで厳しい仕事について家計を支えていたが、とうとう過労で亡くなってしまった。他吉は娘を男手一つで育て上げる。年頃になった娘は近所の若者と一緒になるが、その婿は他吉に厳しく言われてフィリピンへ出稼ぎに行き、病に倒れてしまった。娘お初はその衝撃で亡くなってしまい、孫娘が取り残された。他吉は男の意地で育て上げるが、時代は大きく変わっていた。何につけてもフィリピンでの仕事を自慢する他吉に向かい、孫娘の婚約者は「みんな日本に帰りたかったと違いますか、タあやんを恨んでいると違いますか」とやり返す。その言葉に自暴自棄になった他吉は街で喧嘩し、瀕死の身となる。他吉の原点はフィリピンであった。瀕死の身を引かずって行った先は四ツ橋の電気科学館。フィリピンの空に浮かんでいた思い出の南十字星をプラネタリウムで見ながら死んでゆくのであった。

これが異才・川島雄三監督の手で 1956 年 (昭和 31 年)、映画化された。その際、最後のシーンや、その前に孫君枝 (南田洋子) と婚約者次郎 (三橋達也) が訪れたところなどが電気科学館プラネタリウムで撮影された。また、織田作の生地あたりでもロケが行われている。電気科学館を知らない世代が圧倒的になっている中、当時の様子を動画で見せてくれるこの映画は誠に貴重な資料となっている。

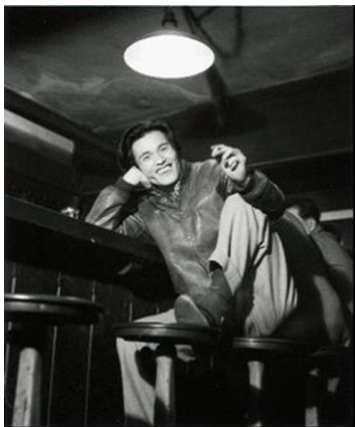
3. 織田作の時代

織田は小品「プラネタリアム」を「大阪の詩情を語ろうとすると、どうしても明治臭くなる。大正臭くなる。誰が決めたのか、昭和の大阪には詩がないのかも知れない」と書き始め、当時最新鋭のドイツ製プラネタリアムに昭和という新時代を見ていた。織田は古い大阪に郷愁を抱き、そこに息づく人々を愛おしく書く一方、それと反対の姿勢も見せる。死の直前に病をおして上京したのは「土曜夫人」の舞台が東京に移るからだったし、その前にも映画製作でしばしば上京していた。新時代の産物・映画への憧れは強かった。東京へ熱い視線を向けていたことと言い、新旧混じったところが織田作の一面であった。

昭和10年代は大大阪と言っていた時代である。大陸との対戦が必至の中、大阪は軍需で潤っていた。阪急百貨店や朝日新聞社の社屋は昭和一桁時代であるが、御堂筋も地下鉄も大阪城も電気科学館もみなこの時代に作られている。一方、多くの市民は昔ながらの慎ましやかな生活を送っていた。家庭への電灯普及率は70%ほどで、電気のない家は珍しくなかったから、わが町は丁度織田作と同じく、新旧入り混じっていた。

この時代、日本全体を戦争の影が覆い、やがてそれは悪夢のような現実となって現れた。「星の劇場」という小品では「歩哨に立って大陸の夜空を仰いでいると、ゆくりなくも四つ橋のプラネタリアムを想ひだした……」と戦地の友人から便りがあったので、周章で四つ橋畔の電気科学館へ行って、はじめてのプラネタリアムを見た、と書いている。これが本当だったのかどうか分らないが、似たようなことはいくらかもあつたろうと想像される。ベンゲットのタあやんはいくらでもいたに違いないし、南方に送られた人たちが無事に引き揚げて来て、子どもたちに南十字星のことを語り聞かせていたことも容易に想像できる。

「わが町」は反戦小説である、と言っていた人がいるが、確かにそうとも読める。タあやんは頑固者だったためにフィリピンの工事では少なからぬ同僚を死に追いやってしまった。それを当時の軍部に重ね合わせて見ることもできよう。そんな苦しみの中でも、それに立ち向かう術を知らない庶民を不甲斐ないと思いつつも、織田は突き放すことができなかった。



晩年の織田作。銀座のバーで。酒は飲めなかったが



映画「わが町」の辰巳竜太郎と南田洋子（孫の君枝役）



昭和12年開館した四つ橋の電気科学館